

いのちのパンであるキリスト

ヨハネ福音書6:35-40

【新改訳2017】

- 6:35 イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。
- 6:36 しかし、あなたがたに言ったように、あなたがたはわたしを見たのに信じません。
- 6:37 父がわたしに与えてくださる者はみな、わたしのもとに来ます。そして、わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません。
- 6:38 わたしが天から下って来たのは、自分の思いを行うためではなく、わたしを遣わされた方のみこころを行うためです。
- 6:39 わたしを遣わされた方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしが一人も失うことなく、終わりの日によみがえらせることです。
- 6:40 わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 「イエスが与えるいのちのパン」と「イエスがいのちのパンである」とはどう違いますか。
- (2) 37節で、父がわたしに与えてくださる者を「わたしは決して外に追い出したりはしません」とはどういう意味ですか。
- (3) 39-40節の「父のみこころ」は何ですか。

【解説】

① 主はいのちのパンそのものである

この箇所において、主イエス・キリストの最も素晴らしいことばの三つが、真珠のように、つなぎ合わされている。その一つ一つが、まことのキリスト者の誰にとっても、大切なものである。それらすべては共にあって、真理の鉱脈を形作り、これを尋ね求める者は、決して徒勞に終わるといふようなことはない。



第一に、この箇所には、「キリストがご自身について語られたことば」がある。イエスが、「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません」(35節)と言われた。

主は、主ご自身が人間の魂のために定められた食物であることを、私たちが知るように望んでおられる。すべての人の魂は、そのままでは、罪のために飢えて死ぬ以外にない。

キリストは父なる神から与えられた、満ち足らせてくださる方であり、救済者であり、人間の霊的窮乏の医者である。空虚な魂がその欠乏を満たされるのは、キリストとその仲保者としてのお働きにあって、キリストのその贖いの死にあって、キリストとその祭司でいますことにあって、キリストとその恵みと愛と力にあってであり、キリストにあってのみである。キリストのうちにこそ、いのちがある。キリストが「いのちのパン」なのである。

① なくてはならない食物

キリストご自身にパンという名が選ばれているのは、なんと神的な知恵であろうか。聖書時代のイスラエルの民にとって、パンはなくてはならない食物であった。他のものが食卓に上がらなくても、なんとかかうまくやってゆける。しかし、パンがなくてはだめである。キリストにもそれがあてはまる。私たちはキリストを自分のものにしなければならぬ。さもなければ自分たちの罪にあって死ぬしかない。

② パンはすべての人に合った食物である

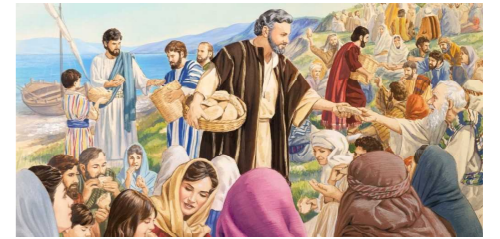
ある人は肉を食べられないし、ある人は野菜を食べられない。しかし、すべての人はパンを好きである。それは女王の食物であり、貧困者の食物である。キリストにもこれがあてはまる。キリストはまさに、すべての階層の人々の必要に合った救い主である。パンは私たちが毎日必要とする食物である。私たちは他の食物を時々食べるだけである。しかしパンは、生涯、毎朝毎晩、食べたい。このことはキリストにもあてはまる。

③ キリストの恵みを必要としない日は一日もない

私たちの人生において、キリストの血、キリストの義、キリストのとりなし、そしてキリストの恵みを必要としない日は一日もない。キリストが「いのちのパン」と呼ばれるのは、もっともなことである。

④ 信仰によってキリストのもとに行かなくてはならない

私たちは、キリストに信頼し、その御手に、私たちの魂をゆだねなくてはならない。そのようにキリストのもとに行くと、キリストは権威あることばをもって、私たちが、いつまでも続く満足を、この世においてばかりでなく永遠に見出す、と約束してくださる。



「わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません」と記されている。

(2) 主のみもとに来る者を、主は決して追い出さない

第二は、この箇所には「キリストがご自分のもとに来る者たちについて語られたことば」がある。イエスが、「わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません」(37節)と記されている。

① 「来る」とは、どういうことか

それは魂の動きであって、人が自らの罪を感じ、自分の力では自分を救うことができないことを知って、キリストの言われることを聞き、キリストに自分を結び付け、キリストに信頼し、キリストにすがりつき、救われるために自分のすべてをキリストに寄り掛けさせてしまう時に起こることである。このことが起こるなら、聖書のことばでは、人はキリストに「来ている」と言われる。

② 主が、「わたしは決して外に追い出したりはしません」と言われたのは、どういう意味か

主が語っておられるのは、その人がどのような者であったとしても、ご自分のもとに来る者を誰も拒まず、お救いになるということである。

その人の過去の罪はとてつもなく大きなものであったかもしれない。今ある弱さや欠点がとてつもなく大きいかもしれない。しかし、その人は信仰によって、キリストのもとに来るだろうか。そうするなら、キリストは、恵みをもって受け入れてくださり、値なしに赦してくださる、ご自分が愛している多くの子どもたちの中に入れてくださり、永遠のいのちを与えてくださる。

これは実に素晴らしい約束である。これは多くの傷ついた良心をいやして来た。この約束が私たちの記憶にしっかりと刻み込まれ、常に記憶にとどまるようにしよう。

肉体と心が衰えて、この世はもはや助けを与えることができなくなる時が来る。その時に、御霊が私たちの霊とともに、私たちが確かにキリストのもとに来ていると証ししてくださるなら、私たちは幸いである。

(3) 御父のみこころ

第三に、この箇所には、「キリストが、ご自分の父のみこころについて語られたことば」がある。「これはわたしを遣わした方のみこころです」というおごそかなことばが、二度繰り返して語られている(39-40節)。

「御父のみこころは、御子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つこと」(40節)と語られ、さらに、「御父のみこころは、キリストにお与えになったすべての者を、キリストが一人も失わない」(39節)と、語られている。

これらの御言葉から教えられることは、キリストが、すべての人に値なしに提供されている救いの恵みを、この世にもたらしてくださったということである。

荒野において(燃える蛇に)かまれたイスラエルは、青銅の蛇によっていやされたが、主はこの青銅の蛇の出来事から、救いの絵を描いておられる。青銅の蛇を「見る」ことを選んだ者は、すべて生きることになった。



荒野の青銅の蛇

それと同じように、永遠のいのちを願い求めている者は誰でも、信仰によってキリストを「見て」、永遠のいのちを値なしに受け取ることができる。

そこには何の妨げも、制限も、制約もない。感謝なことに、福音の条件は広く単純である。すべての人が「見て生きる」のである。

さらに教えられることは、キリストは、ご自分にゆだねられた魂が誰も失われたり、捨てられたりするのを、決してお許しにならないということである。

キリストはその魂を、この世と肉と悪魔の働きにもかかわらず、安全に守ってくださり、恵みから栄光へと至らせてくださる。

ご自分の群れの子羊一匹さえも、荒野に取り残されることは決してない。終わりの日に、主は、ご自分の責任のもとにゆだねられた群れの全体を、栄光へとよみがえらせてくださり、ひとりも失われるということはない。

(まとめ)

まことのキリスト者は、この箇所にある真理によって養われ、その恵みの真理を神に感謝しよう。

①いのちのパンなるキリスト、②ご自分に来る者をすべて受け入れてくださるキリスト、そして③信じる者すべてを保持してくださるキリストである。

キリストは、すすんでご自分に信頼する者すべてのためであり、キリストは、そのように信じている者すべての、永遠の所有、分である。